

白金霞

2月号



平成27年2月発行

第48号

白金葭定例会案内

三月二十日(金) 12:00 ~ 15:00 ア第三 兼題：斑雪^{はだれ}、白子

四月十七日(金) 12:00 ~ 15:00 ア第四 兼題：涅槃西風、春興

五月一日(金) 10:30 ~ 17:00 築地市場、東銀座区民館

五月十五日(金) 12:00 ~ 15:00 ア第三学習室 兼題：山焼、鶯

斑雪^{はだれ}、白子の参考句 (三月二十日分)

草も木も仏日昏れの斑雪

化粧して修理不能な斑雪

源泉の豊かな手水はだれ雪

斑雪山真下に機上のティータイム

安達太良は夜雲被さぬ斑雪村

はだれ野に朽ちて簾の仏かな

軒低く干す小鰯や斑雪

白子干し朝日に干して納めけり

午後^ごに吹く風を待みて白子干す

ちりめんを干しかへしつゝ撮み食ひ

暮遅し白子は白く乾し上り

舞阪の畑かがやけり白子干

早鞆の瀬戸に並びて白子船

月例会会報 ('15 / 2 / 20 7名欠2) (山焼、鶯)

飯田孝三

銀河系氷柱賑ふ星いくつ

自販機にごとりと寒九の缶の水

山焼きのはたて海あり秋津島

笹鳴きのまだ稚^{いけな}きいとま哉

吹き返す老の口笛ほうほけきよ

増田陽一

鳩も少女もお先にどうぞ梅の路

鴨すでに去りし野川の緩調曲^{アンダンテ}

子午線や酢味噌にて食ふ春の鮎

鶯の藪擦る音ぞ如月は

遠山火猪鹿も燃ゆるなり

光成高志

山焼きの炎一気に山登る

焼かれたる山と雪富士向ひ合ふ

山焼くや牧羊犬^{ボーダーコリー}は怖がれり

春水の潺々せんせんとゆく後樂園

鶯の声に憧あくがれ天城越え

初音して日当たるところ雑木山

どんが鳴る山焼く合図天に抜け

焼山となりてリフトのすぐ動く

薄氷を動かし鴨の行方かな

探梅やバスの終点まで来たる

鶯や川原で開く塩むすび

鶯や郵便受けに子の手紙

鶯や野立の席の緋毛氈

山焼のすたれ過疎化の進みをり

鶯を右に左に女坂

手の甲に塗りて紅買ふ春来る

春荒の海に真向ふ安吾の碑

文弱の肩の薄さよ蜩汁

光 みち

文机を白布で拭けり寒の明け
産土の脇参道や匂鳥

終挿す月の手賀沼正面に

暮れてなほ火のたてがみの山火かな

狂ほしの女男の鳥とぶ山火かな

梅の花一生一句と又思ふ

山焼を見届けてゐる奥嶺かな

吉羽多美子

浮雲やもう畦塗りの田んぼあり

うぐいすにマフラーはずせて笑われる

思わずも足を止めたる初音かな

墓参りケツキヨと背後で鳴く日なり

羅漢山初音一つで消えにけり

倉田紀子

山焼いて火口黒々顔を出し

待春のこころ抱いだきてひとを待つ

山焼の煙の果てや昼の月

松村幸一

青木啓泰

武者昭七

隅っこに臘梅咲いてる駐車場
春曉や夢の名残りのうつくしき

浅野正美

手作りの吊し雛ゆれ幼児笑む

福豆を撒く事もなく福茶飲む

山焼に草の根眠り醒ますらん

木蓮の蕾揃って天を指す

いつ鳴くか鶯の声耳澄ます

選句結果 (数字は入選数 左添書きは添削句)

4 手の甲に塗りて紅買ふ春来る

4 春荒の海に真向ふ安吾の碑 (坂口安吾)

3 春荒の海に真向ふ安吾の碑

3 山焼きの炎一氣に山登る

3 暮れてなほ火のたてがみの山火かな

3 薄氷を動かし鴨の行方かな

3 鶯や郵便受けに子の手紙

3 山焼の煙の果てや昼の月

3 狂ほしの女男の鳥とぶ山火かな

2 鶯を右に左に女坂

2 浮雲やもう畦塗りの田んぼあり

紀子

〃

高志

幸一

みち

多美子

昭七

幸一

多美子

啓泰

2 どんが鳴る山焼く合図天に抜け

2 鶯や野立の席の緋毛氈

2 鶯の声に憧^{あく}れ天城越え

2 自販機にごとりと寒九の缶の水

2 羅漢山初音一つで消えにけり

2 探梅やバスの終点まで来たる

1 終挿す月の手賀沼正面に

1 山焼いて火口黒々顔を出し

1 鶯や川原で開く塩むすび

1 手作りの吊し雛ゆれ幼児笑む

1 墓参りケツキョと背後で鳴く日なり

1 山焼くや牧羊犬^{ボーダーコリー}は怖がれり

1 待春のこころ抱^{いだ}きてひとを待つ

1 鴨すでに去りし野川の緩調曲^{アンダンテ}

1 文弱の肩の薄さよ蜆汁

1 山焼に草の根眠りを醒ますらん

1 山焼に草の根眠り醒ますらん

1 文机を白布で拭けり寒の明け

1 子午線や酢味噌にて食ふ春の鮎

1 隅っこに臘梅咲いてる駐車場

1 山焼のすたれ過疎化の進みをり

1 木蓮の蕾揃って天を指す

1 梅の花一生一句と又思ふ

みち

多美子

高志

孝三

啓泰

みち

幸一

昭七

多美子

正美

啓泰

高志

昭七

陽一

紀子

正美

紀子

陽一

昭七

多美子

正美

幸一

初音して日当たるところ雑木山
 遠山火猪鹿も燃ゆるなり
 焼かれたる山と雪富士向ひあふ
 山焼きのはたて海あり秋津島
 山焼きのはたて海あり相模湾
 銀河系氷柱賑ふ星いくつ
 うぐいすにマフラーはずせて笑われる
 いつ鳴くか鶯の声耳澄ます
 春暁や夢の名残りのうつくしき
 鶯の藪擦る音ぞ如月は
 吹き返す老の口笛ほうほけきよ
 産土の脇参道や匂鳥
 山焼を見届けてゐる奥嶺かな
 春水の潺々せんせんとゆく後楽園
 春水の潺々せんせんたり後楽園
 思わずも足を止めたる初音かな
 焼山となりてリフトのすぐ動く
 福豆を撒く事もなく福茶飲む
 笹鳴きのまだ稚いとけなきいとま哉
 鳩も少女もお先にどうぞ梅の路

みち 陽一 高志 孝三
 啓泰 昭七 陽一 孝三 紀子 幸一 高志 啓泰 正美 孝三 陽一

一句鑑賞

光成高志

鴨すでに去りし野川の緩調曲

アンダンテ

陽一

鴨が既に去った野川はゆるやかに流れている。春の小川はさらさらゆくよ、と川べりを歩く作者の季節感をアンダンテとハイカラに表現した。下五の緩調曲アンダンテは吉田一穂の詩の中に出てくる表現とか。「春水と行くを止むれば流れ去る」(S18 誓子)とか尾崎放哉の「春水に沿うて歩いて止る」の強い省略の効いた句の余情まで誘導してくれる佳句である。

鶯や郵便受けに子の手紙

多美子

鶯がホーホケキョと鳴いている昼、郵便受けを開いて郵便物を取り出したところ、子の手紙があつて、はつと心が動く。「子の手紙」でも切れがあり、その後の心理は無論省略されている。省略のところを想像して書くのが鑑賞である。通信手段は手紙から電話、ケータイ、最近ではスマホになって、手紙は書かれなくなっているのに、さすがわが子よ、手紙をくれるわと莞爾として封をきるのである。それとも、何事よ、心配事が出来たのかしらと不安が走る、いや、鶯の声が東風の便りを持ってきたのである。いい知らせに決まっている。

春荒の海に真向ふ安吾の碑

紀子

安吾は紀子さんと同郷の坂口安吾のことで有名な小説家ですので添え書きは不要です。不良少年とキリスト、恋愛論、戦争論、デカダン文学論、続墮落論、悪妻論、太宰治情死考、いづこへ、特攻隊に捧ぐ、風と光と二十の私と、などの作品を残していますが、中の名言が読者の心を打つのでしょうか。「めいめいが各自の独自なそして誠実な生活をもとめることが人生の目的でなくて、他の何物が人生の目的だらうか。」という言葉が「デカダン文学論」にあるそうですが、これは本誌のころろばえと同じだと思います。春荒の海は日本海、それに真向かい立っている安吾の碑は、安吾自身と思っているでしょう。まさに、「荒海や佐渡に横たふ天の川」の芭蕉の屹立する精神と同じものを感じます。

山焼に草の根眠り醒ますらん

正美

一読、合点々と膝を打ちます。伊豆高原の大室山の山焼きはまさにこの句の通りです。枯れた萱草を焼いて冬眠している草の根を覚まし新しい芽吹きを促します。山焼きを終えると地元の人々は春が来たと実感するそうです。「らん」は現在推量を表す助動詞らむの連体形。「山焼いて火口黒々顔を出し」(昭七)「山焼の煙の果てや昼の月」(同)も同じ火口丘の山焼の客観描写で、自ずと季節感がじわりと伝わる佳句。

隅っこに臘梅咲いてる駐車場

昭七

どこかの結社では、それでどうしたと言われかねない句だが、私はこういう句も齊藤茂吉風の俳句であってこの駐車場に今の実相があると思つて選んだ。隅っこも咲いてるも口語だが、平明であり、読者によく通達する。書かれている現実に入つて、そこに眼に見えないものを見る。駐車場の前は家屋敷があつた。臘梅はその庭の隅にあつて当季になれば黄の花が咲き香りを漂わせていたのだ。その家にどのような事情があつたのか知らないが、今は臘梅のみが残り駐車場になつてゐる。「夏草や」の平泉での芭蕉の句に近い感慨が湧いてくる。

一句鑑賞

武者昭七

どんが鳴る山焼く合図天へ抜け

みち

「どん」はもと明治のころ正午を知らせる空砲をいつたがこの場合はもちろんそうではない。山焼きを始める合図の太鼓である。その音が大気を震わせ天頂にまで響きわたる。それを「天に抜け」といったところが妙。号砲一発。万物活動開始の号砲でもある。

羅漢山初音一つで消えにけり

啓泰

羅漢山が固有名詞なのか羅漢さんの立ち並ぶ山の意味かそれはどうでもいい。せつかく耳にした鶯の声が初音一つで消えてしまったのが何とも惜しまれるのである。

それが「消えにけり」というため息にも似たリズムに滲み出ている。あとに広がるのは早春の澄んだ空気と静寂。

木蓮の蕾揃って天を指す

正美

木蓮は春光あまねく照り渡る時期、葉に先立つて白または紫の大きな花をつける。みごとな大木になり花に力のある木だ。今はまだ蕾だけれどすでに開花に向けてのエネルギーが外にまであふれている。それを「天を指す」といった。早春の賛歌であり、いのちの賛歌である。

産土の脇参道や句鳥

紀子

「産土」は生まれた土地の守り神。氏神さまとか鎮守さまとかも呼ばれた。作者が辿るのは脇参道というからあまりひとの通わぬ道であろう。だから鶯の声もひとときわ澄んで聞こえる。余談ながら神社参りには、やはり長からうが短からうが参道を伝わっていくべきだと思う。神います森の気配がおのずからぼくらの気持ちを落ち着かせ厳肅にしてくれるからである。作者がわざわざ脇参道を選んだわけもそんなところにあるう「句鳥」という言い方も「うぐいす」という言い方とは違った雅な気分を産んでいる。

鶯や郵便受けに子の手紙

多美子

メールの全盛で郵便受けに「手紙」と呼ぶものを見つけて出すことが少なくなった。切手を貼った手書きの封書を開けるときの心のときめきは何とも言えないもののな

に。それを手にしたおりもおり鶯の声。感動と喜びが二倍に跳ね上がる。まさに鶯の便りである。軽やかなリズムがいい。

一句鑑賞

増田陽一

狂ほしの女男の鳥飛び山火かな

幸一

早春、枯れた下草を焼くことで望ましい生態系が維持されるといふ、恒例の山仕事であるけれど、そこに栖む小動物にとつては突然の「地獄変」かも知れない。狂ったように鳥たちが飛び立つ景。「狂ほしの女男の鳥」には作者の濃厚な感情移入が感じられ、劇的に構成されて実によくまいものである。鳥は逃げられるけれど、金子光晴のマレーシアでの山焼きの叙述の中の、蛇やヤマアラシが死ぬところも連想してしまう。

山焼の煙の果てや昼の月

昭七

山から立ち上がる煙を眺めていると、煙の消えて行く先に淡い昼の月が見えた、と言う、大きく視線を移動させて春近い空も見えてくる。虚子に「山焼の煙の上の根なし雲」というのがある。こちらはごつごつとして写生的であるし、掲句は短歌的叙情で広々として心地よい句である。どちらが良いとはいえないが句会では掲句の方に点が入りそうである。

山焼くや牧羊犬は怖がれり

高志

牧草地の斜面を焼こうとすると、この牧場の隅々まで知り尽くしているはずの犬が、普段とは違う物々しい気配に怖じて居竦んでいる、という、神経質な犬の一面を見せている光景。コリー種の犬は利口で牧羊犬として古くから用いられている、と辞書にはある。背後に雪のアルプスが見えてきそうな句である。

探梅やバスの終点まで来たる

みち

早咲きの梅を探してバスで入れる限りまで来た。さてここからは歩くのである。山中にどんな梅が隠れているのだろうか、という期待がある。はやくも梅の香が感じられるようでもある・・・。

文弱の肩の薄さよ蜆汁

紀子

痩せた男が瞑想するように屈みながら小粒な蜆を拾っているさまが浮ぶ。「文弱」と名乗るところには、逆説的に或る矜持があるわけだ。「肩の薄さ」にこの人物の裕福とえない孤高の感じがあつて・・・と小説的な連想が広がる。「蜆汁」がうまい。

鶯や郵便受けに子の手紙

多美子

久しく音信のなかった子供からの手紙が郵便受けに入っていたのであろうか。春を告げる鳥の鶯の声との取り合わせから、これは親にとって嬉しい出来事であつたに違いない。「郵便受けに」の措辞だけで突然の来信を見

つけた喜びを感じさせる。俳句形式のよく生きた句である。

ハガキ句(第47報) 管見

飯田孝三

老鶯や放哉の墓ぼつねんと

敏子

放哉の墓は、命終の地小豆島、西光寺は南郷庵にある(筈である)。「ぼつねんと」は、まさに、放哉の墓たらずまいそのものであり、又、その独居無言の生活を象徴するかのようだ。生前の放哉の孤影が見えてくる。瀬戸

ハガキ句四十七号(09/6/22)

孝三

菖蒲湯の菖蒲の莖の赤かりき

〃

鐵線の咲きつぎ分る阿修羅像

5月22日広池学園七句

春美

薔薇の風学園の中吹き抜ける

多佳子

なんじやもんじや揺らして風の五月かな

かほる

蜜を吸ふ蜂耿耿と震へをり

哲也

葉桜やキャンパス裏に検診車

修平

樹下涼し孔子木てふ名を持てり

たか子

葉桜や子育てのこと怪我のこと

高志

六月十二日霞の会より

あわてずにわがみちをゆくかたつむり

貞治

老鶯や放哉の墓ぼつねんと

敏子

六月20日映画鑑賞

梅雨晴るる「おくりびと」見て戒田線

高志

内海を望む墓所に夏鶯が聞こえる。

上五は「老鶯や」か「夏鶯」かと思つたが、なるほど「老鶯や」の方が時間と空間が広がり、句の奥行を深め、放哉の生涯をいとしむ思いが切である。

入れるものがない両手で受ける

放哉

春の山のうしろから烟が出だした

放哉

葉桜や子育てのこと怪我のこと

高志

遊びざかりの幼児たちが、葉桜の木洩れ日の下を駆け廻る。ふと、過ぎし子育ての日々を思う。膝を擦りむいたり、腕をくじいたり、はらはらせられたが、日毎の成長ぶりが、何よりも、日々のはり合ひだった。もう、何十年も昔だ。喜んだり、気をもんだりした一駒々々が蘇る。今は、夫婦の子供らが子育てに勤しむ。切字「や」が面目。

梅雨晴るる「おくりびと」見て成田線

高志

死は莊嚴。立ち会う人の気持は嚴肅。日常の中の非日常である。未見だが、「おくりびと」が映す死は、同時に、人をこころ洗われる思いにするらしい。記憶する記事も觀賞後の清浄な気持、一種の清涼感を伝えていた。なるほど、「梅雨晴るる」に通底する。いわずもがな、「おくりびと」は、最新のアカデミー賞受賞映画。「おくりびと」を見ての帰り、梅雨晴れ間の電車で、ふと、口をついだ吟。「梅雨晴るる」は、紛れもない、映画見ての心情。「成

田線」は、“日常”に戻った、ぐるりの現実。そこらの、阿吽の隙が勘所だ。

葉桜やキャンパス裏に検診車

修平

どこそこで、見かけそうな光景だ。検診は、明るい葉桜の下がいい。日に透く葉脈が、フィルムの映像にも通い、キャンパス「裏」のイメージが呼応して面白い。「葉桜」、「キャンパス裏」、「検診車」のどれを欠いてもあぶない。偶々、その場に出くわした、打坐の吟だろうか。受診したのかな。だったら検診結果は、間違いなく“異常なし”。

鉄線の花散り了へて金東子

多佳子

鉄線花が散り終わり、見通しになった垣か柵の端っこに金東子が差してある。鉄線花と金東子の照応が、いく言いがたい。納得。

蜜を吸ふ蜂耿耿と震へをり

哲也

「耿耿」がさわり。豪奢。蜂は雀蜂か。横縞の腹が見えてくる。「震へをり」は生の嚴肅か、はたまた、白日の恍惚か。

樹下涼し孔子木てふ名をもてり

たか子

聖哲のいるところ、即ち涼し。孔子木は楷の木の特称（孔子の墓所で採取育苗したのが湯島聖堂に）。葉並整然。子、樹下訓えを説く一幅の図を思う。

なんじゃもんじゃ揺らして風の五月かな かほる

「なんじゃもんじゃ」は、関東で、その地方には見られない種類の太木をいう称。千葉県香取市の神崎神社境内の楠、明治神宮外苑のひとつばたごなどが知名とか。五月の光景である。「して」が冗漫、「風の五月」は常套か。

薔薇の風学園の中吹き抜ける 春美

情景が見える。学園は広く明るい構内である。
あわてずにわがみちをゆくかたつむり 貞治
なるほど。仮名づくしに工夫のあと。 妄言謝々。

(平 21・7・3)

お便り広場 (到着順、敬称略)

寒中お見舞い申し上げます。早いもので年が明けてもう一ヶ月が過ぎようとしています。今年は年賀も失礼しましたが、お元氣のことと思います。私も元氣で羊年を迎えました(七回目)。野菜作りをしながら同好会の人とゴルフを楽しんでいます。農業もそろそろ限界かなー。ひとり酌む新年の酒みづからに

(ひとり住む家を守りて屠蘇を酌む に直してみました。)

(1/24 榎田健三)

白金蔭一月号草石蚕(ちよろぎ)の記事を拝見しました。璃子さんの方へ流してあげました。(孝三さんのハガ

キ句四十六報管見もプラスして) ありがとうございました。高志様 (1/27 万世遊)

白金蔭新年号拝受致しました。毎号庄倒されています。それに兼題読めない字、意味不明であり、不勉強振りを反省しています。先日松屋の古本市にそして神田へ参り、雑本を多数求めて、どうなるものかと思っています。それにしても皆様益々御活発ですばらしいですね。益々の御活躍を祈ります。二月は初午八人が参集します。みんな元氣です。 (1/28 小山陽也)

拝復「白金蔭」一月号第47号を有難く拝受。感謝しています。12ヶ月六千円の送付は別便現金封筒にしたく存じます。あと一号で四十八号四年間の「白金蔭」かと存じ、心からお慶び申しあげます。次は六十号(五年)が目標化と存じ、楽しみです。名句選択。

初詣まつすぐ帰り雑煮椀

青木啓泰

七、八歳から十歳の頃のことを回想。昭和二十一年(二十四年(一九四六)五〇)。戦後の食料難の時代。農業も兼業であつても麦入りの米飯の日もある。正月の餅つきは贅沢な時代。七歳だから元旦の雑煮は丸い餅を七個食べなさいという母や祖母。十歳の元旦には十個の雑煮餅。餅の好きでなかった私はうんざり。今想い出すと罰当りの長男の我儘(わがまま)。しかし、初詣の神社、自宅の北約七〇mほどの低い山の途中にある國司神社。古

い古い神社で蘇我倉山石川麻呂にゆかりのあるという神社。石碑に刻まれている沿革（縁起）。石川麻呂という右大臣ゆかりの國司神社と言われてもさっぱり理解できなかった。石川の自転車屋さん一族の祖先のことかなどと考えていた。中大兄皇子や藤原鎌足と協力して蘇我入鹿をはじめ蘇我宗家を滅亡に追い込んだ人物石川麻呂のことらしいと分ったのは大学に入学後のこと。神社の近くに石川姓の家が数軒あり、皆さん、背は高くて肌白で面長鼻筋も通り、二重の瞼のやや吊眼の美男美女の一族。この人たちの古い古い祖先の石川麻呂さんと思い込んでいた少年のころ。この神社に初詣して、境内の大きな焚火に当って体を温めて急いで数十段の石段を駆けるようにして下りて帰宅。世界の平和や自分の将来の大成などを祈願した初詣ではなかった。一族一家の無事、元氣であることを祈った程度だったと記憶。帰宅しての仏壇や神棚にも参拝したのは母や祖母の指示でのこと。雑煮碗は餅よりも油揚げや紅白蒲鉾とやゝ高級な竹輪と鰯の切り身。里芋、人参、長葱。この中の鰯の切り身と長葱が好きになれなかった少年の頃。しかし、母や祖母の半ば強制で食べる苦痛。これもあれも、みんな御伽噺か夢物語の中のように懐かしく想い出す。この初詣の青木さんという作者にも感謝。私にとつて名句。次の一句。

掛軸を鶴の絵に替え年迎ふ

浅野正美

白髪の老夫婦に松の木と鶴亀の絵に旭日という掛軸。やや茶色に煤けている絵。毎年同じ掛軸の正月。節分過ぎてそのまま。三月ころになると水面の古木にとまる翡翠^{かわせみ}の絵や「閑さや岩にしみ入る蟬の声」という芭蕉の句を墨書した掛軸。この句が芭蕉の名句と知り、山形の立石寺などを知ったのは高校二年生の時の国語の美人先生山田寿美江先生の講義でのこと。この先生と職員室前の築山の草取りのホームルームの時間に寿美江先生（当時二十五、二十六歳）のような先生とエッチしたいという趣旨のことを喋ってひどく叱られたことも懐かしく回想。奈良女子大卒の才媛才女の美女、平安美人というべき山田先生。光成高志兄の崇拜崇敬する恩師。またまた連想回想は拡大飛翔。この句の作者浅野正美さんにも感謝。感謝して同人の皆様の方のご健筆を祈念申し上げます。光成高志玉机下 河村博旨

H 27 二〇一五 1 / 28 (水) (青江由紀夫)

数日で寒明けと存じますが、寒さが続く中、ハガキ句 67 報をお送り頂きありがとうございます。皆々様のご健吟は明らかで新年詠の数々楽しくかつ、勉強させて頂きまた山尾さんからお聞き及びと思います。どうやらトボくと句を作り、月一回の句会に出ており、銀座百店の銀座俳句に投句している程度でございます。お手間のか

かかるハガキ句 67 報賀状の部分ルーペで詳しく拝見し楽しんでおります。ご自愛を。(1/29 長屋璃子)

ハガキ句拝受しました。初めて拝見しました。なかなか楽しい編集ですね。旅の詩を読む。原稿2篇同封しました。よろしく願います。(1.30 武者昭七)

すっかりダラダラして申し訳ありません。暫くは賛助会員にして下さい。会費と古代だけは誌代としておくります。二月十一日は初午で私の誕生日(83歳)でした。神主さんが来宅、兄弟それぞれ十一人が集まりました。元氣は元氣です。皆様の益々の御発展を祈ります。

(2/15 小山陽也)

(お礼) おはがき拝読、有り難うございました。ご心配をおかけして恐縮です。再会がずれこみ残念ですが、今月も右のとおり出句させて頂きます。よろしく願ひ申しあげます。拙句「菜の花や歌声「朝はどこから来」は今も氣に入っています。前号では、「元旦の」、「昭和生き」について、諸先達の行き届いた鑑賞をいただき感謝しています。句の好し悪しは、自分ではわからない。俳句は読者あればこそ「お蔭の文芸」だと改めて思いました。有り難うございました。再会しての句談が楽しみです。まだまだ春は名のみ、ご自愛、ご健吟のほどを祈りあげます。(平27・02・14 飯田孝三)

よろしく願ひ致します。稲敷郡旧東村で今日既に畦

塗り田を見てきました。

(2・20 青木啓泰)

春は名のみの寒さが続きます。こちら広島でも二月の気温はあがりそうにもありません。さて先頃は厳しくも温かい御指導を頂き有難く心より感謝で一杯です。(中略)今回分送付致しますが、お暇の折にお目通し下さい。せせらぎに鳥群がりて二月来る(ボランティア帰り)

節分や丹波黒豆炒りて撒く(正月の黒豆残して炒ります)

朝一挽香り広がる露の臺(田舎の屋敷隅に初めて見つけ)

濃き紅の凜と締るや牡丹の芽(庭の牡丹の現状)

梅見かな甘酒する老夫婦(広島縮景園)

てつぺんに白帽子かぶり山笑う(山陰への道浜田道)

とても他の方々には見せられませんが。先月美智さんから貴方に送って見ってもらったとのハガキを頂きましたが、今はどこにも出さないで下さい。まだ恐る恐るの状態で。高志様

勝子 (2・21)

(俳句は今現在の作者を表しています。何年か経って読むと自分の成長が実感される、そういう文芸ですので、ありのままの自分を知ることが大切です。恐る恐るの状態はありません。どうか、どんどん作って自選する力を養って下さい。多作多捨という言葉もあります。そういう意味でここに掲載しました。高志)

受贈誌 (H27年2月号)

エンジンを掛けて除雪車胴振ひ (彩121号)

平野ひろし

どか雪に矢竹へし折れ拉げ折れ (〃)

〃

露霜の鉄柵透かし光薔 (〃)

平山三郎

枯蘆の音ともならず触れあへる (〃)

清野かつ江

喫茶さぼうる混む二期期の神保町(飛行雲73号)駿河岳水

唐黍焼く千歳空港よき香り (〃)

〃

都鳥スカイツリーに羽裏見せ (あすか2月号) 山尾かづひろ

飯宮に早春の噺やはらかき (俳枕210)

長屋璃子

辞書広げ一字を探す秋灯下 (太陽140号)

務中昌己

初日挿す原爆ドームの瓦礫にも (〃)

〃

大注連の社をよぎり秋つばめ (〃)

児玉信子

夕暮れの花屋に残る吾亦紅 (〃)

大橋勝子

名月や宮島の灯の瞬きて (〃)

大橋忠正

こだま

彩121号(平野ひろし主宰抜き)

雑巾にまとわりつける木の葉髪

光成高志

鳩胸の朝日にずらり百合鷗

〃

俳窓評論纂

*新年会の翌日小石川後樂園にて「運河」の吟行句会があり、佐藤宏之助さんに頼んで出席させてもらった。「萱」の吟行句会は三句出句で物足りなく思っていたので、試みに宏之助さんを頼りに出たものである。十句投句7句

選の互選の後、茨木和生主宰の選があり、特選三句には色紙が賞品としてもらえて終わりとなる。特選二句は左の句であった。

一と枝も括られてゐず雪吊は

久幸

只寒し西行堂の在りし跡

宏之助

庭石に著き蓮痕石路の花

陽子

茨木和生主宰の投句は左。

梅咲けり一分咲きにもいたらねど

名苑の木曽川も水涸るる頃

名苑の崖の日向の冬すみれ

名苑に田のあることも冬あたたか

福寿草あるかなきかのもの見付く

紅つはり来てをり山桜の枝も

水崩れ落つ名苑の冬の滝

冬あたたか黒木づくりの四阿は

だつこしてもらひ臘梅嗅ぎゐたり

私の選句は左。

鴨の声蓬萊島に日の満ちて

冬の日を浴びて明るし石畳

・寒の底より野面石引き上ぐる

名苑の崖の日向の冬すみれ

・寒禽の声引く空の青さかな

・涸滝に遊べり小雀四十雀

陽子

真人

乃梨子

和生

陽子

明子

青年の匂ふマスクをしてゐても

乃梨子

雪吊が暇もて弄ぶ後樂園

・養生の幼木囲み敷松葉

ますみ

臘梅やドーム屋根より日の覗き

半寿

・印が主宰とダブった選。右棒線は添削ありの箇所。
私の投句の十句は左。

雪吊の遊び揺れゐる水の上
ウインチを巻き上ぐる音鳴のこゑ

・鏡石真直ぐ立つて日脚伸ぶ

内庭の雪吊三つ一つ揺れ

・鴨来る八の字水尾の三つ重ね

寒林に入りて葉擦れの音を聞く

隈笹の隈の白きに冬の蠅

冬の水田月橋をまるくせり

早梅や鶴歩くを得手として

臘梅に樹間の空の青極む

互選の時の私の句は全没、主宰の選も全没、最後に長棒の句として右の・の句が読み上げられた。長棒の意味は私には判らなかつた。後送られてきた清記用紙には赤丸の中に線が引いてあって、宏之助さんによると、入選だという。私は帰途の道すがら考え考え家について反省反省、無心！とカレンダーに書いてけりを付けた。今冷静に考えると、梅の蕾が膨らんで咲きそうであつた梅の

描写を「紅玉の蕾のあまた寒紅梅」と書き付けたが投句しなかつた。左の誓子先生の句を思い出し、また私もそれに類似した句を作つた経験もあつたのだから、「紅梅の咲く前まさに紅氣立つ」とかと、作ればよかつたのにと
思う。和生主宰は「紅つはり来てをり山桜の枝も」と作られていたのを見逃した。「つはり」が芽ぐむという意味の古語である。所謂つわりととつてもわかるのに。
紅つはり来てをり山桜の枝も

和生

まだ紅の多く桜の五厘咲き

高志

桜咲く前より紅氣立ちこめて

誓子

以上は細かいことで大したことではない。自分の過去の経験に縛られて自由な発想が出来ていないのだ。日々新たなりを頭でわかつていても実行していない証拠。自分も堂々巡りの発想をしているではないかという反省。物を見て、じつと見て感ずることがなくなっているマンネリに陥っているのではないかという反省。私意をやぶり、我を無くして無我となり、心を空しゅうして無心にならなければ、どうして自然の刺激が感動になつて受け止められようか。無心になれ。もしこういう境地で作句できれば、和歌に師匠なしと同じく俳句に師匠なしだ。作品本位になれということ、今わかつた。

旅のうたを読む

XII

— 幻影の旅 —

ああ大和にしあらましかば

薄田泣董

武者昭七

あゝ、大和にしあらましかば

いま神無月、

うは葉散り透く神無備の森の小路を、

あかつき露に髪ぬれて、往きこそかよへ、

斑鳩へ。(以下略)の詩、現実の旅ではない。我が身は遠

い異郷にあつて大和の景物に思いをはせた幻の旅の詩で

ある。それは冒頭の一行に明らかである。今は神無月、

もしもわが身が大和にあつたとしたら・・と自らに言い

聞かせ作者は斑鳩の地に向つて幻の旅にたつ。「うは葉」

とは梢の茂り。それも地に落ちて青空の透いて見える甘

南備の森の小道を暁の露に髪も濡れながら辿りゆくであ

ろくに、というのである。冒頭から斑鳩の地に寄せる作

者の熱い思いが流麗な調べでうちだされて僕らの思いを

ともに斑鳩にむかつて引き込んでいく手法が見事である。

五音と七音を自由に組み合わせた典雅な調べと古典的な

辞句の連なりは四十行にもおよんで作者はぼくらを古代

のなつかしくも華麗な世界に十分遊ばせてくれる。作者

の繰り広げる斑鳩幻想は優しくも美しい。(この部分は省略

しました。失礼) 僕が初めて斑鳩の地を訪ねたのは六十年

余りも昔のことだ。そしていまも時に幻想の斑鳩を訪れ

る。僕の斑鳩は今ももう幻想の中にしかないからだ。畠

中の道に立つて眺めた法起寺の塔の遠い孤独なただずま

い、足をのばした西の京では唐招提寺の土塀のくずれが

胸に沁みた。「荒廃の美」を教わったと思った。薬師寺は

すっかり立派になつてしまつたけれどあの頃西塔の礎石

の窪みが湛えた雨水にさかしまに影を映していた東塔の

姿は震えるほどに美しかった。いまは復元された塔がき

らびやかな光を放っている。「こころの斑鳩」に出会える

のは幻のなかだけであると思えばやはりさびしい。(不

思議なご縁を感じる。昭七さんの斑鳩への旅の10年後私が同じ場

所を訪れた。年も同じである。二十歳の旅であつた。私はルーブ

ル美術館のモナリザが京都に来るというので、それを見る計画を

して実行後奈良に回つて帰つたのを記憶している。その時撮影し

た薬師寺の東塔は「アーキテクチャー」の表紙に採用した。観光

バスではあつたが、法隆寺の五重塔の洗練された美しさに心が洗

われる思いがしたのを今も覚えている。)

我孫子日記

1/16	例会
1/17	運河吟行 句会
* 1/21	SOA
1/23	*2 千駄木・築地
1/28	SOA
1/30	*3 銀座
2/4	SOA
2/11	*4 後樂園
2/13	胃透視
2/15	*5 大室山山焼
2/18	SOA
2/20	例会



* 鏡石真直ぐ立つて日脚伸ぶ

鴨来る八の字澤の三つ重ね

*2 蓬菜梅咲けり大観音前の

大寒の卵焼き店大行列

*3 雪降り銀座京橋丸の内

*4 春の雪吊水面にあればじぐざぐに

鏡石水陽炎の映りをり

春泥に莖敷かるる道めぐる

春水の潺湲^{せんせん}とゆく後楽園

*5 山焼や煙竜巻起こりたる

春の富士に待す雪嶺の連なれる

山焼や鶏の串焼きよく売れる

山焼の果てて鴉の群れよぎる

春愉しポニーテールの運転手

高志

〃

〃

〃

〃

〃

みち

〃

高志

〃

〃

みち

〃

〃

編集後記

例会後コピアンへの道に塀からなだれ咲
いている黄の花の名は？と幸一さんと言
いて、当てんとすれども、二人とも出ず、三日後、
幸一さんから電話で教えられた。黄梅であ
った（上の写真）。梅の仲間ではなく、木犀
科の落葉低木。迎春花という名も持ってい
る。戻りなき日が黄梅の黄を弾く（八木沢

高原）という本意に沿ういい句がある。手持ちの歳時記
にメモがあり以前見たことがあるのに記憶を呼覚まされ
なかった。こういうことがこれからは頻繁になるのだろ
う。覚悟せよ。

勝子さんの手紙から、個性ということを考えた。それ
を考えるよき例がゴッホにある。ゴッホは、気違いとい
う己の特殊性と闘って芸術作品を残した人だ。自分の癖
とか病気とかの特殊性を乗り越えて、自分の感情が万人
の感情になるようなものをつかんだ人だ。それがほと
の個性である。生まれつきとか、癖とか社会的条件など
の個性的なものは偶然であつて、みな克服しなければ、
つまり、己と闘って普遍的なものをつかむ努力をしなけ
れば、ほんとの個性は得られない。こういうことをやつ
ている人は文学者・芸術家・思想家である。以上は小林
秀雄からの耳学問であるが、俳句にも通う考えたと思
います。

白金霞 第48号 平成27年2月発行 編集・発行人 光成高志（TEL &
FAX 04・7187・1068）発行所 〒270・1119 我孫子市南新木2-14-17
表紙の題字…加納綾女 写真2月26日の白金霞